

研究論文

『斐太後風土記』 記載産物の生産量と地理分布 (2)

—繊維・織物類・紙類を中心に—

松森 智彦

『斐太後風土記』とは明治六年に完成した岐阜県飛騨地方の物産誌である。この資料には飛騨地方の3郡25郷415村落について、人口、戸数等と共に、生産物の構成と収量が記載されている。本稿では、記載頻度および生産量の高い繊維・織物類と紙類、そして煙草と油類を合わせた12品目を対象に、その生産量と地理分布について考察した。結果、次の事が示された。①飛騨地方では繭と生糸が主な商用の産物である。②益田郡に集中／欠落する産物がある。生糸・紬の生産が集中し、布・麻・桑・荏・菜種・煙草の記載が欠落する。吉城郡に集中する産物には紙と菜種がある。③産物の二次的な加工は集約している。楮を原料とする紙の生産は吉城郡小鷹狩郷に、繭を原料とする生糸・紬の生産は益田郡に集中している。

1. はじめに

『斐太後風土記』とは明治六年に完成した岐阜県飛騨地方の物産誌である。この資料には飛騨地方の3郡25郷415村落について、人口、戸数等と共に、生産物の構成と収量が記載されている。前稿(松森 2016)では産物の生産量と地理分布、そして人口との関係について、主要な農作物である穀物類と豆類に着目し、報告した。本稿では主要な手工業製品である繊維・織物類と紙類を中心に分析を進め、報告を行う。『斐太後風土記』に

記載されている諸産物は、同一の産物であっても、アユ・鮎・年魚のような表記ゆれを持つ。この表記ゆれを整理した後の産物数は381品目である。これらの記載頻度を郡ごとに集計し、103村以上に記載があるものを図1に示した。ただし「木の實」は枳・檣・栗をまとめている。図の30品目のうち、非食用の手工業製品とみなせる産物は、繭・楮・布・桑・麻・真綿・生糸・煙草の8品目である。このうち、6品目は繊維・織物業関連の産物であり、残りは製紙業に関わる楮と、煙草である。また荏と菜種は可食の産物ではあるが、採

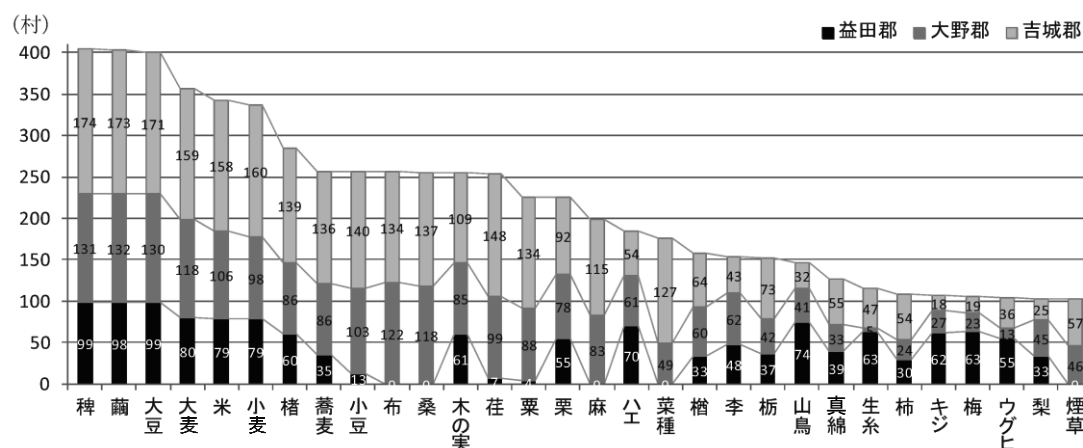


図1 産物の記載頻度 (404～103村)

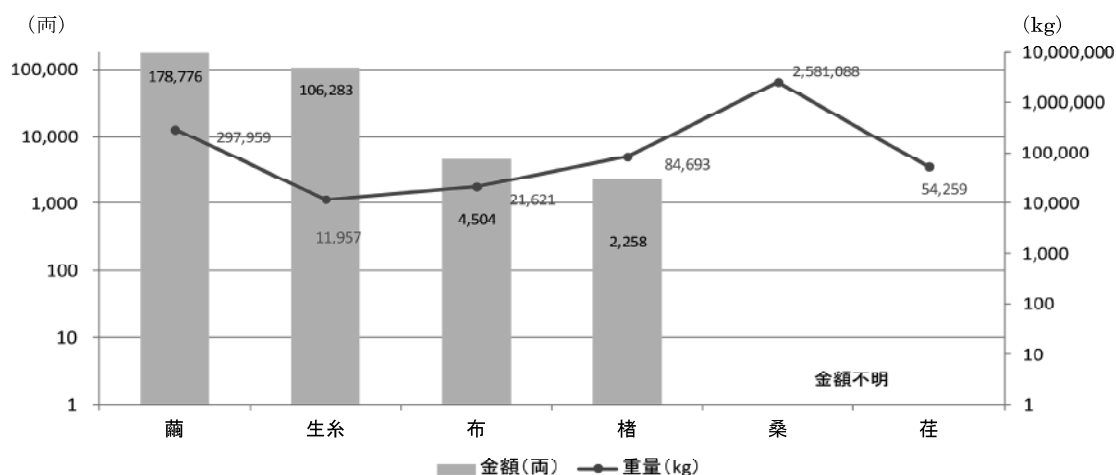


図2 主な産物の生産金額と重量

油目的の利用が考えられる。本稿では繊維・織物類と紙類、そして煙草と油類の産物に注目して、その生産量と地理分布について考察を行う。

2. 主な産物の生産量と金額

まず、記載頻度の高い産物について、その生産量を集計する。図1において全体の6割以上の村落に産物記載のある13品目のうち、商品作物また手工業製品とみなせる産物は繭・楮・布・桑・苧の5品目である。これらは収量の単位が異なるため、金額および重量換算を行い、量の比較を行う。楮・布については『斐太後風土記』下巻附録の「國産諸品賣出價概記」(明治三年)に金額換算値が示してある。また繭については『岐阜県史〈通史編 近世下〉』に「明治五年物産概略表で繭一貫が金二両一分」とあるため、この値を用いる¹。桑、苧については金額換算することができないため、重量比較に留める。また生糸は記載頻度が高くは無いが、当時最大の輸出品であったことが「國産諸品賣出價概記」に記されている。その輸出量は7,650貫目すなわち28.6875t、また金額にして255,000両と書かれている²。そのため、これも加えて繭・楮・布・桑・苧・生糸の6品目で金額および重量の比較を行う³。

¹『岐阜県史〈通史編 近世下〉』に次の記載がある。「本書記載の明治四年ごろの繭生産合計七万九千貫、これを戸当りにすると五貫六百匁で、米二石一斗に相当する。明治五年物産概略表で繭一貫が金二両一分、米一斗七升が金一両相当。」(本書とは『斐太後風土記』を指す。岐阜県 1972, p.440)。

図2に主な産物の生産金額と重量について示す。図の縦軸は対数目盛となっている。最も生産金額の大きい産物は繭である。生産量は79,455.8貫(297,959.25kg)である。金額換算値は2.25両／貫であるため、その金額は178,776両となる。次に生産金額の大きい産物は生糸である。生産量は3,188.5貫(11,956.875kg)である。金額換算値は33.3333両／貫であるため、その金額は106,283両となる。布の生産量は14,414反である。後述するがこの布は麻布と考えられる。重量換算値は不明だが、一反400匁すなわち1.5kgと仮定すると、合計重量は21,621kgである。金額換算値は0.3125両／反であるため、その金額は4,504両となる。楮の生産量は22,584.85貫(84,693.1875kg)である。金額換算値は0.1両／貫であるため、その金額は2,258両となる。桑の生産量は688,290.2貫(2,581,088.25kg)と極めて多い。しかし換算値が不明であるため、金額への換算は行えなかった。苧の生産量は548.07石である。苧一石あたり99kgと仮定すると⁴、その重量は54,258.93kgである。苧についても換算

²刊本に「絲 八百五十箇 此目方六千七百五十貫目、此代金二十五萬五千兩」とあるが、「一把三百目、一箇三十把目九貫目、代三百兩」とも併記してある(蘆田編 1916, p.286)。850箇×9=7,650貫であり、7,650貫×(300/9)=255,000両である。「六千七百五十貫目」は「七千六百五十貫目」の誤記と考えられる。

³他に、全体の6割未満で、記載頻度の比較的高い商品作物・手工業製品に麻・菜種・真綿・煙草がある。しかし、これらの金額換算値は不明であり、また記載頻度も劣るため、ここでは上述の6品目のみを取り上げる。

⁴小山ら 1982, p.394 より。

値が不明であり、金額への換算は行えなかった。金額換算のできた4品目のうち、繭と生糸の合計は285,059両である。楮と布の合計は6,762両であるが、これは繭と生糸の合計のわずか2.37%である。すなわち、商品作物また手工業製品より得られる収入のほとんどは、繭と生糸から得られていると考えることができる。桑の生産重量は、二番目に生産重量の大きい繭の、8.7倍である。桑は養蚕に不可欠なものであり、桑市などで売買されたと考えられる。そのため、一定の収入にはなったと思われる。ただし、繭の原料であるため、繭の合計金額を超えることはないであろう。

また荏は菜種とあわせて採油目的で栽培されたと考えられるが、金額換算はできなかった。荏の換算値が見つからなかったので、ここでは菜種の換算値で代用して荏の生産金額を試算する。換算値を仮に1.6両/石とすると⁵、荏の金額は877両となる。多く見積もって2.1両/石であったとしても1,151両であり、楮の金額の半分である。やはり、商品作物・手工業製品の主は繭・生糸であったと考えられる⁶。

布は、『岐阜県史』に指摘のあるように、絹織物ではなく麻布を指すと思われる⁷。木綿の産物記載のある村は48村であるが、このうち39村(81%)において木綿と布は共起する。すなわち別の産物として書き分けられている。そのため、

布は木綿ではない。絹の産物記載のある村は11村であるが、絹と布は共起しない。しかし繭・生糸の価格と比べ安価であるため⁸、織賃を考えると布は絹ではないだろう。また、産物の中に麻緒・麻種・麻の品目は存在するが、麻布はない。麻の単位は全て重量の単位である貫・目であるため、原料の麻と考えられる。このように、布は麻布を指すと考えられる。

図2には含まれないが、繭・生糸に係する絹と紬について述べる。絹は11村において産物記載があるが、生産量が分かるのは10村である。その合計は84反である。一般的な絹織物は一反0.7kgであるため、その重量は58.8kgである。換算値が不明であるため、金額には換算できない。また紬(紬・シケ紬・紬縞)は70件の産物記載があるが、生産量が分かるのは63件である。その合計は2,730反と2貫である。一反0.7kgと仮定すると、2貫は7.5kgであるため、10.7反となる。その合計は2,740.7反である。『斐太後風土記』下巻附録「必要品他國より買入高凡積」(明治三年)の紬に「百疋代二百兩」とあるので、紬の金額換算値は1両/反である。すなわち紬の生産量の合計金額は2,740.7両である。この金額は、繭の合計金額の1.53%、生糸の合計金額の2.58%と大きくはない。また紬の合計重量は1918.49kgである。これは繭の合計重量の0.64%である。仮に蛹を除いた重量を1割と仮定しても、6.4%である。また生糸の合計重量の16.0%である。このように、紬の生産重量は少なくはないが、繭・生

⁵ 天保期の河内国河内郡四条村の中塚家の菜種の売値段を用いた。天保4, 5, 7, 8, 9, 10, 12, 13, 15年の一斗あたりの金額がある。先より7.9, 10.3, 8.7, 12.6, 11.0, 11.0, 10.7, 7.5, 7.6匁である(宮下1968, p.70)。平均を取ると1.6両/石であり、最大値を取ると2.1両/石である(一両銀60匁)。また同じく菜種の例であるが、油垂口(菜種一石から絞り取れる油の割合)は、江戸期に1割7分から2割5・6分とのことである(石川1998, p.119)。荏と菜種では油垂口も異なると思うが、試みに2割と仮定すると、先の荏から絞り取れる油は109.614石になる。近世において菜種油は1合40文と知られているので、一両=4,000文より菜種油一石は10両である。先の荏に適用すると1096.14両となり、これも本文と同様に楮の金額の半分ほどである。

⁶ 繭の1kgあたりの金額は0.6000両である。一方、生糸の1kgあたりの金額は8.8889両である。繭の重量は蛹と水分がほとんどで、一般的に繭重量の1から2割程度が生糸になるとされている。繭10kgより生糸1kgが取れると仮定しても、6両と8.8889両には開きがある。これは糸引きその他の作業による付加的な価値であろう。

⁷ 「元来布といわれるものは、麻・葛・楮などの繊維で織った織物で、絹に対していわれていた。近世において一般に布といわれたのは、多く麻布を指している。この麻布は、近世初以前の、いわゆる木綿以前の時代における庶民の代表的衣料であった。」(岐阜県1972, p.491)

表1 郡ごとの産物記載頻度と生産量

記載頻度 (村数、括弧内は%)												
	繭	生糸	真綿	紬	布	麻	楮	紙	桑	荏	菜種	煙草
吉城	173 (43)	47 (41)	55 (43)	4 (7)	134 (52)	132 (54)	139 (49)	18 (67)	137 (54)	146 (58)	125 (72)	57 (55)
大野	132 (33)	7 (6)	35 (28)	7 (13)	124 (48)	114 (46)	86 (30)	3 (11)	118 (46)	99 (39)	49 (28)	46 (45)
益田	98 (24)	62 (53)	37 (29)	44 (80)	0	0	60 (21)	6 (22)	0	7 (3)	0	0
生産量 (%)												
吉城	38	35	40	10	59	43	58	92	59	45	95	83
大野	24	4	24	3	41	57	17	0	41	55	5	17
益田	38	61	37	87	0	0	25	8	0	0	0	0

⁸ 図2より、布の1kgあたりの金額は0.2083両である。繭は0.6両/kg、生糸は8.9両/kgである。

表 2 産物記載の共起率と産物生産量の相関係数

	繭	生糸	真綿	紬	布	麻	楮	紙	桑	煙草	苳	菜種	人口	標高	生産量合計	単位
繭	105	0.28	0.31	0.13	0.62	0.59	0.71	0.06	0.63	0.25	0.62	0.43	-	0.97	79455.80	貫
生糸	0.75	13.5	0.31	0.44	0.12	0.1	0.35	0.15	0.09	0.04	0.13	0.16	-	0.28	3188.50	貫
真綿	0.71	0.73	3	0.21	0.24	0.21	0.32	0.09	0.24	0.13	0.26	0.24	-	0.31	791.41	貫
紬	0.35	0.25	0.5	40	0.03	0.02	0.16	0.11	0.02	0.01	0.02	0.02	-	0.13	2740.70	反
布	0.65	0.24	0.27	-0.9	40	0.74	0.49	0.06	0.73	0.36	0.66	0.46	-	0.62	14414	反
麻	0.28	-0.1	0.17	0.82	0.27	15.3	0.48	0.03	0.86	0.38	0.64	0.47	-	0.59	7378.80	貫
楮	0.15	-0	0.01	-0.1	0.26	0.22	45	0.08	0.53	0.26	0.53	0.46	-	0.69	22584.85	貫
紙	-0	-0.2	-0.5	0.99	-0.1	0.38	0.28	80	0.02	0.01	0.05	0.07	-	0.07	5260.00	束
桑	0.76	0.55	0.66	0.1	0.49	0.25	0.24	0.29	1550	0.4	0.68	0.48	-	0.61	688290.20	貫
煙草	0.08	-0.2	0	-1	0.19	0.11	0.29	-	0.22	12.8	0.28	0.23	-	0.25	3367.14	貫
苳	0.05	0.01	0.11	-0	0.13	0.21	0.64	0.07	0.07	0.14	0.9	0.56	-	0.61	548.07	石
菜種	0.43	0.23	0.19	1	0.4	0.19	0.49	-0.1	0.3	0.48	0.23	0.9	-	0.42	391.30	石
人口	0.7	0.83	0.89	0.27	0.62	0.24	0.15	0.04	0.55	0.1	0.07	0.29	140	1	92081	人
標高	-0.3	-0	-0.1	-0.1	-0.1	0.08	-0.1	0.58	-0.2	-0.4	0.12	-0.2	-0.1	585	-	-
(記載数)	403	116	127	55	258	246	285	27	255	103	252	174	415	415		

2種の産物（及び人口・標高）をA、Bとした際に、対角成分の上部に共起率（ $A \cap B / A \cup B$ ）を、下部に生産量の相関係数（A、B共に正）を示す。対角成分には生産量の中央値を示す。

糸には遠く及ばない。また生産金額も楮より大きく、布より小さい程度で、繭・生糸に比べれば微々たるものである。やはり絹製品の中心は、繭と生糸である。

ほか、表1に各産物の郡ごとの記載頻度と生産量（%）を示す。図1にて取り上げた繭・生糸・真綿・布・麻・楮・桑・煙草・苳・菜種、そして紬と紙を対象とする。また表2に産物記載の共起率と産物生産量の相関係数を示す。これらの表は次節以降にて参照する。

3. 繭・生糸・真綿・紬・絹の生産量と地理分布

繭の記載村数は稗に次いで多く、403村（全体の97%）において記載がある（図1、図5⁹）。その生産量も298トンと大きい。郡ごとの繭の生産量の合計は、吉城郡30231.5貫、大野郡19175.1貫、益田郡30049.2貫であるが、人口で除して一人あたりの生産量を求めると、先より1、0.5、1.3貫となる。すなわち、吉城郡に対し、大野郡は半分、益田郡は1.3倍の生産である。村ごとの生産量は100貫以下を最頻値とし、200貫以下の村が全体

の7割を占める（図3）。図の折れ線グラフからは、特定の階級（more：1000貫より大など）への生産量の偏りは無いことが分かる。

生糸の記載村数は116村と、繭に比べ少ない。生糸は大野郡において記載頻度が低い。大野郡が7村に対し、吉城郡が47村、益田郡は62村である。またその生産量は大野郡が127.5貫（4.0%）に対し、吉城郡が1121.1貫（35.2%）、益田郡が1939.9貫（60.8%）である。益田郡では、阿多野郷37村を除く全村（8郷63村）において生糸の

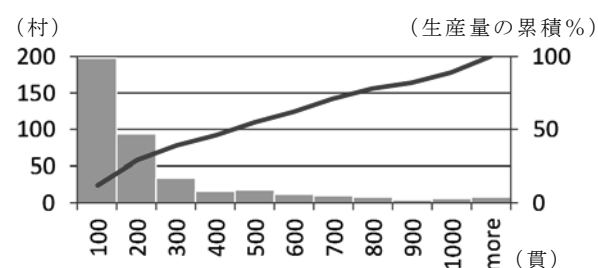


図3 繭生産量のヒストグラム

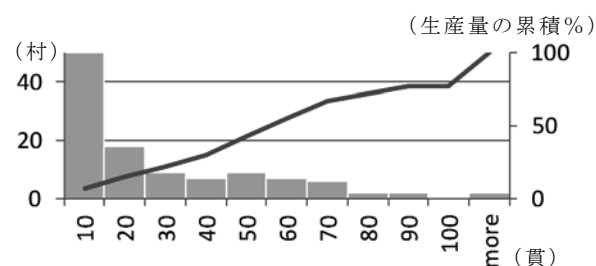
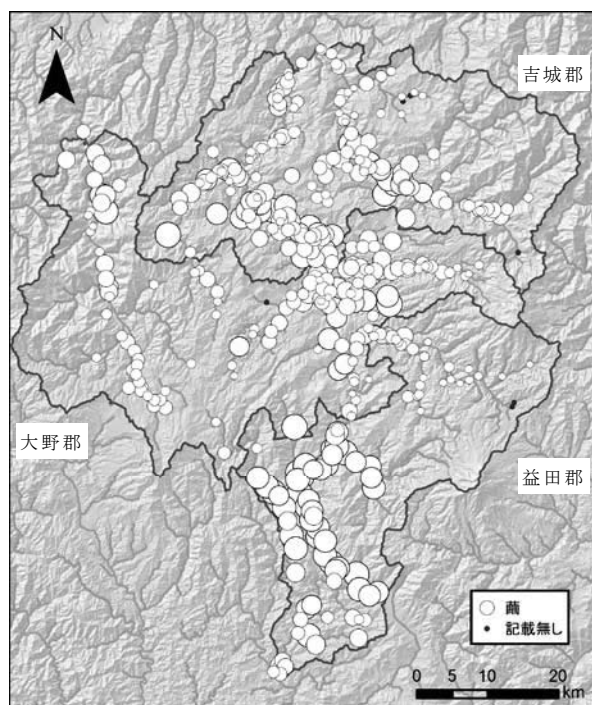
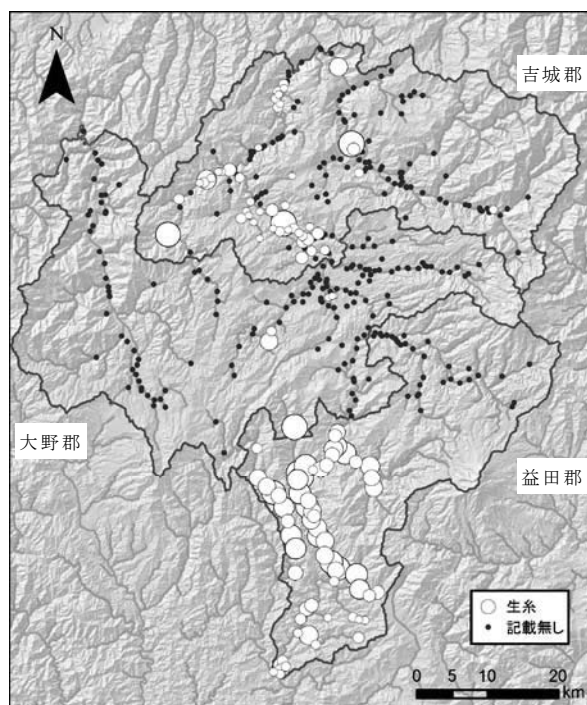


図4 生糸生産量のヒストグラム

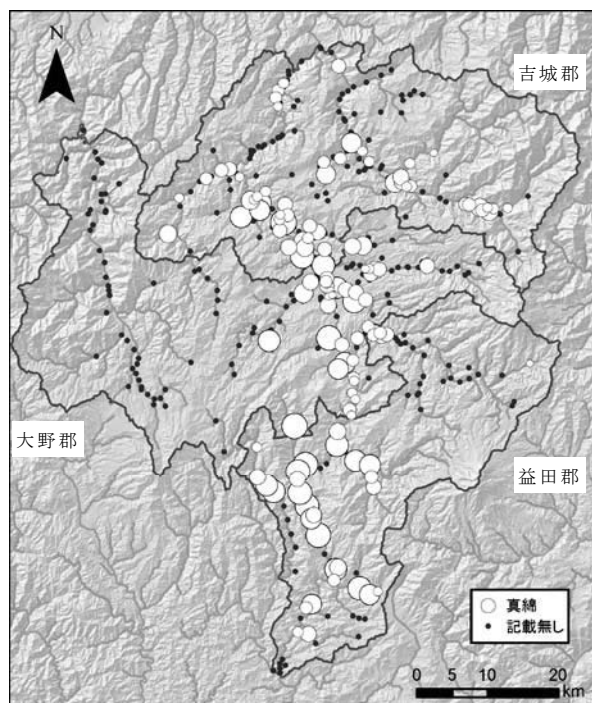
⁹ 地図には産物の生産量を丸の大きさで表している。この丸の大きさ（村落の地点のシンボル）は生産量の差異を表現する事を目的としており、地図から生産量そのものを読み取る事を目指していない。凡例に値が含まれないのは以下の理由による。①階級数が32と多い。②分類方法(Jenksの自然分類)が値の読み取りに向いていない。



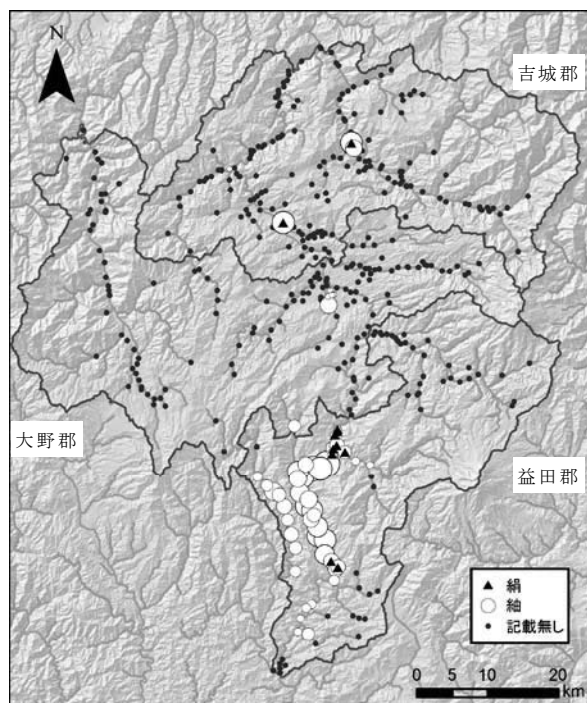
繭の地理分布
(403 村, 79455.8 貫)



生糸の地理分布
(116 村, 3188.5 貫)



真綿の地理分布
(127 村, 791.41 貫)



紬・絹の地理分布
(55 村, 2740.7 反・11 村, 84 反)

図5 繭・生糸・真綿・紬・絹の地理分布

記載がある。益田郡では、阿多野郷を除き製糸業が盛んであったことが分かる。この生糸の益田郡への偏りは、生糸の売却先から考えることができる。生糸は当時の飛騨の、他国への主な輸出品であった。生糸の売却先は京都西陣、また横浜が中心である。生糸を買い付けに来る商人は、飛騨の南より益田郡の益田街道を通して高山に入る。品質が良ければ、生糸商人は飛騨の南端で生糸を買い込むであろう。飛騨南端から高山までは、かなりの距離があるためである。そのため、益田郡では生糸の生産が盛んになったと推測される。村ごとの生産量は10貫以下を最頻値とし、20貫以下の村が全体の6割を占める(図4)。図の折れ線グラフからは、moreの階級が全体の2割を占めることが分かる。これは古川町方村と舟津町村の二村で、合計は720貫であった。

真綿の記載村数は127村、郡ごとには、吉城郡55村、大野郡35村、益田郡37村である。真綿とは木綿ではなく、煮た繭を引き伸ばし、綿としたものである。生糸を引くには品質の低い繭を、真綿にする事が多いため、生糸と真綿の地理分布は類似している。一方で、生糸は大野郡において記載が少ない特徴があるが、真綿にそれはない。生糸と真綿の共起率も0.31と低い。生糸と真綿の生産量の相関係数は0.73と高いが、生糸また真綿はそれぞれ人口と相関係数が高いため(0.83, 0.89)人口の影響が考えられる。人口の影響を除いた偏相関係数は-0.04となり、生糸と真綿の生産量に相関が無いことが分かる。

紬の記載村数は55村、郡ごとには吉城郡4村、大野郡7村、益田郡44村である。紬は紬糸を用いて織った織物である。紬糸とは真綿より糸を紡ぎ出したもので、生糸と異なり撚りをかける。太さが不均一で節のある丈夫な糸で、織られた紬布は絹とは異なる独特の織物となる。記載は益田郡に偏り、記載頻度では8割、生産量では87%が益田郡である。

絹(織物)の記載村数は11村、郡ごとには大野郡に欠落し、吉城郡2村、益田郡9村である。その生産量は84反と少なく、これは紬の生産量2740.7反の3%である。生産量が少ないことから、飛騨国内で絹織物を織ることは盛んではなく、絹の原料である生糸の形で、商品として国外に売却されていたと考えられる。

4. 布・麻・楮・紙の生産量と地理分布

布(麻布)の記載村数は258村、郡ごとには益田郡に欠落し、吉城郡が134村、大野郡が124村である(図7)。また、布の原料である麻は、記載村数は246村、郡ごとにはやはり益田郡に欠落し、吉城郡に132村、大野郡に114村である。布と麻の地理分布は類似し、共起率も0.74と高い。しかし生産量の相関係数は0.27と低く、量に関係はなさそうである。麻布を織る村は、原料の麻を生産・採取するため、余剰分の売却は考えられる。そのため布と麻の共起率は高まるであろう。布の重量合計は先述の重量換算では21,621kgである。麻の生産量は27,670kgであり、これは布の約1.28倍である。布を織るのに必要な麻と、同量強(1.28倍)の麻が産物として記載されている。なお、本稿では麻に麻苧を含めている。産物記載249件中、麻が199、麻苧が50である。しかし麻と麻苧が併記してある村は246村中2村(鼠餅・岩井村)のみである¹⁰。鼠餅村では麻苧の量記載が無く、岩井村では麻と麻苧の量記載が同量であった。多くの村では麻と麻苧のいずれか片方のみを記載していたため、これらを併合し、麻とした¹¹。

楮の記載村数は285村、郡ごとには吉城郡139

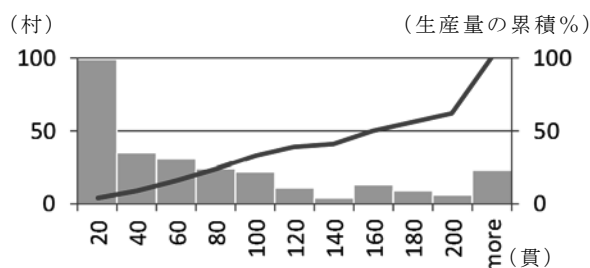
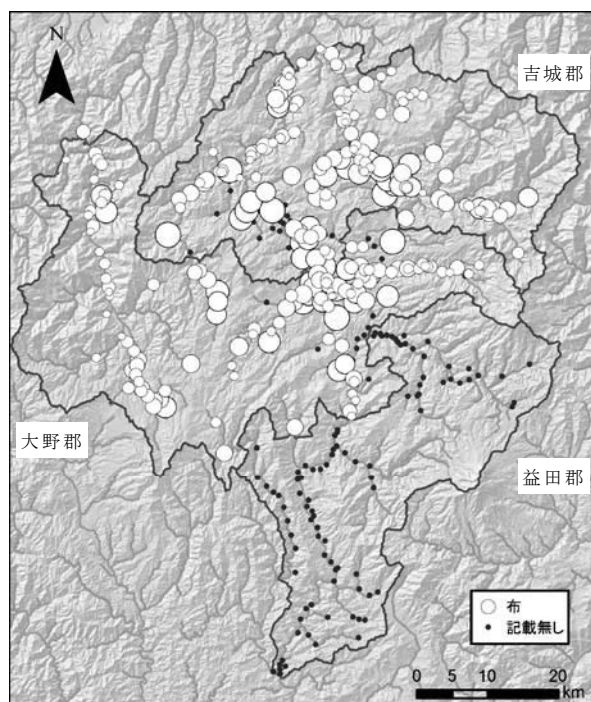


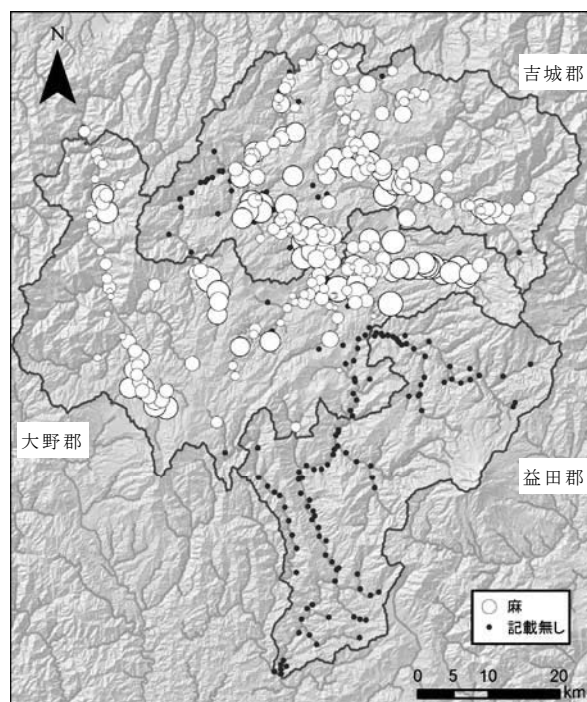
図6 楮生産量のヒストグラム

¹⁰山之山村では麻の記載が重複していた。量の記載は片方のみであった。

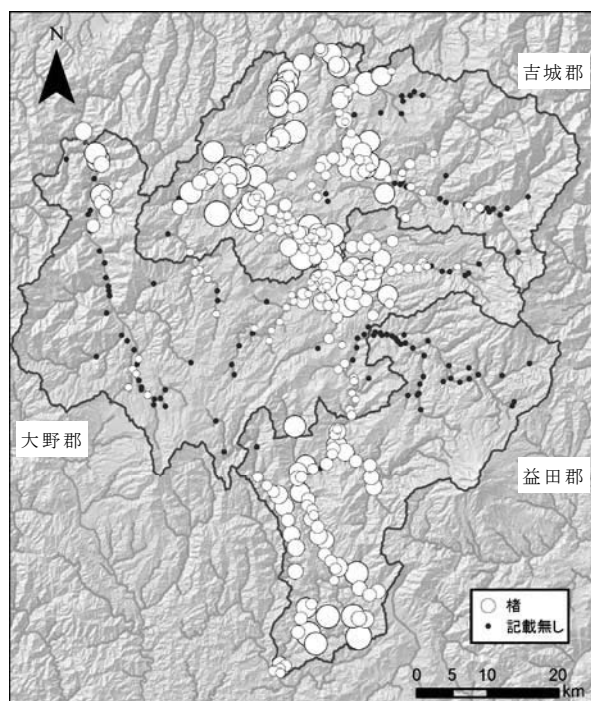
¹¹『斐太後風土記』の小八賀郷の項に麻の記述がある。「大^マ麻^マ右三組の村々には、麻も繁茂して、六月土用までには、其長一丈餘にも成て、家は宛然竹林中に棲ごとし。土用過ぎて、大麻の下葉の一葉二葉、自然落るを見て、村毎に茹て、多くは煮扱芋とし、又は茹て、数日の間日に乾して、其を水に浸して後、土中に埋、又は畑に積て、古筵或は芥を被置き、日を歴て取出て、篋もて粗皮を刮去て、仕上るを最上とす。故に白麻苧・青麻苧(アサヲの約ソ也。)の名有。(神代の白丹寸出・青丹寸出のこと、可思合。)其村々にて、布に織て着用の餘は、皆高山町、又は他國へ賣出すこと、古しへより爾り。」(p.117)



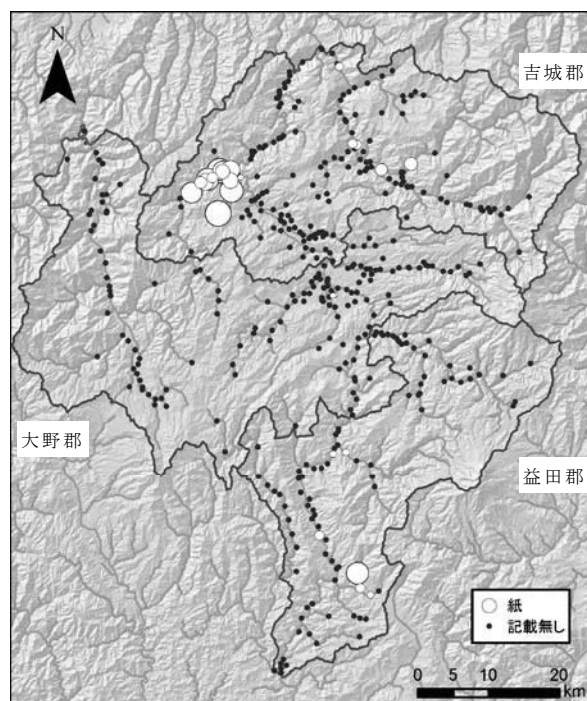
布の地理分布
(258 村, 14414 反)



麻の地理分布
(246 村, 7378.8 貫)



楮の地理分布
(285 村, 22584.85 貫)



紙の地理分布
(27 村, 5260 束)

図7 布・麻・楮・紙の地理分布

村、大野郡 86 村、益田郡 60 村である。楮は阿多野郷を除く 3 郡全ての郷にて記載がある。特に益田郡（阿多野郷を除く）では 83% 以上（平均 96%）の村落に記載がある。一方で、生産量は 58% が吉城郡に偏っており、17% が大野郡、25% が益田郡である。図 2 において、楮の合計重量は第 3 位であり、楮の生産金額は布のおよそ半分である。養蚕業と並行し、麻製品とあわせて、楮の利用は村々の重要な産業であったと考えられる。村ごとの生産量は 20 貫以下を最頻値とし、100 貫以下の村が全体の 76% を占める（図 6）。図の折れ線グラフからは、more の階級が全体の 38% を占めることが分かる。23 村で 8653.8 貫である。

紙の記載村数は 27 村、郡ごとには吉城郡 18 村、大野郡 3 村、益田郡 6 村である。生産量は 92% が吉城郡に偏っており、残り 8% は益田郡となる。大野郡では高山にて紙類の記載があるが、生産量は記されていない。益田郡では八寸紙、半紙と竹原紙の記載がある。吉城郡では紙、端不切紙、丈高（長）紙、半紙、懐中紙（懐紙）、傘紙の記載がある。吉城郡 18 村中 12 村が小鷹狩郷に含まれており、特に小鷹狩郷の稲越村では 6 種で 2,330 束（全体の 44%）の記載がある。紙の記載村は楮の記載村のわずか 9% であるため、紙の生産は特定の村にて集約的に行われていたことが分かる。紙の製造には専用の装置・道具と技術が必要であるため、原料である楮の栽培は広く行われる一方で、製紙業は一部の村にて専門的に行われたのであろう。

5. 桑・苧・菜種・煙草の生産量と地理分布

桑の記載村数は 255 村、郡ごとには益田郡に欠落し、吉城郡が 137 村、大野郡が 118 村である（図 9）。生産量も吉城郡が多く、吉城郡が 59%、大野郡が 41% を占める。一方で、吉城郡小鷹狩郷では、郷内 34 村中 7 村（21%）のみの記載である。吉城郡の他郷では 88% 以上（平均 93%）の記載であるので、小鷹狩郷のみ欠落が多い。同様の欠落は麻にも見られる。これらは、紙の地理分布と相補的であるため、製紙業が盛んであった小鷹狩郷では、桑また麻の産物利用が進まなかったと考えられる。村ごとの生産量は 1000 貫以下を最頻値とし、2000 貫以下の村が全体の 6 割を占める（図 8）。図の折れ線グラフからは、more の階級が全

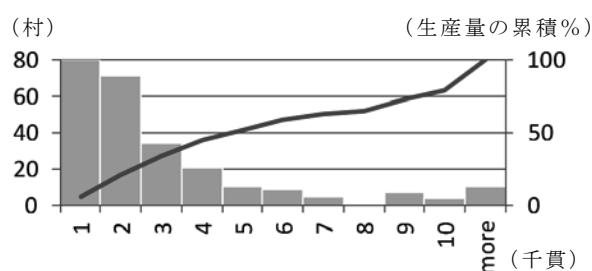


図 8 桑生産量のヒストグラム

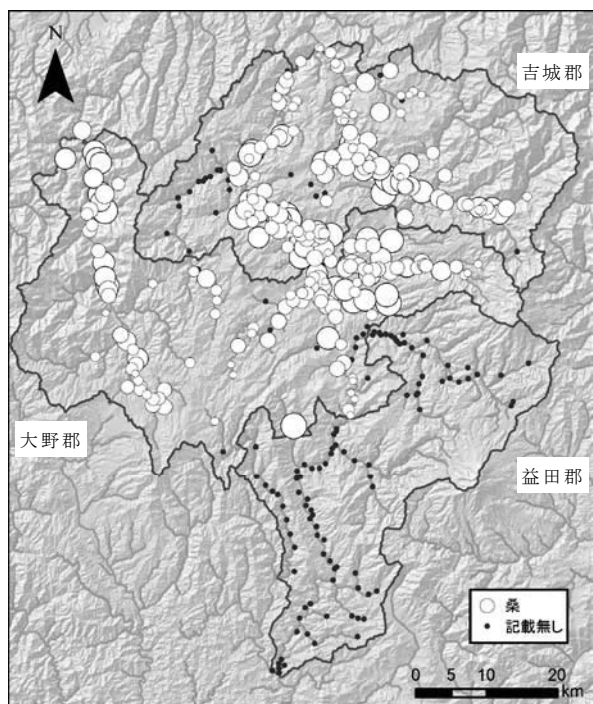
体の 2 割を占めることが分かる。10 村で 145,223 貫である。なお、桑は桑市で売却されたと考えられる。『斐太後風土記』の吉城郡古川郷古川町方村には次の記述がある。「桑市 春蠶・夏蠶を養ふころ、村々より桑葉を扱摘みて負來て商ふこと、高山町また他の郷村の桑市に凡そ同じ。」(p.411)。

苧の記載村数は 252 村、郡ごとには吉城郡 146 村、大野郡 99 村、益田郡 7 村である。益田郡阿多野郷の 7 村には生産量の記載が無いいため、郡ごとの生産量は吉城郡が 45%、大野郡が 55% を占める。苧は大野郡白川郷に記載が少ない。白川郷と阿多野郷を除けば、吉城・大野郡の各郷では 75% 以上（平均 87%）の村落に記載がある。

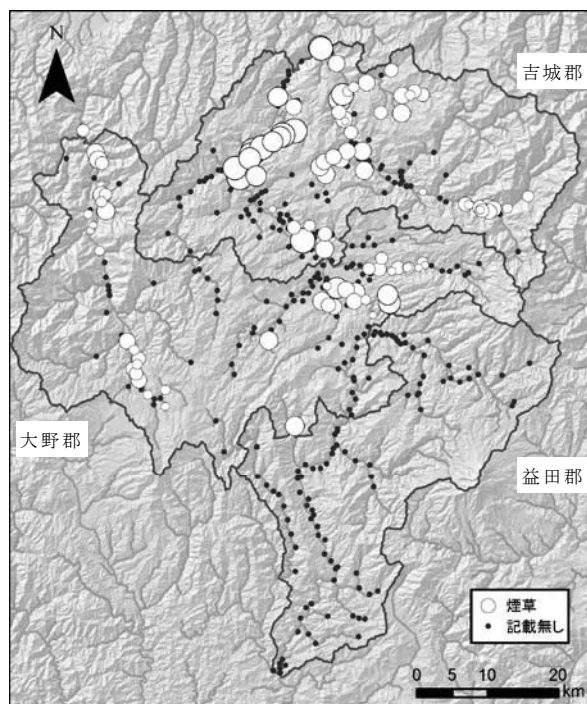
菜種の記載村数は 174 村、郡ごとには益田郡に欠落し、吉城郡が 125 村、大野郡が 49 村である。生産量は吉城郡が 95% と多数を占め、大野郡はわずか 5% である。生産量の欠落は、両郡それぞれ 3 村であるため、大野郡に欠落が多い訳ではない。村あたりの生産量平均は吉城郡が 3.0 貫、大野郡が 0.4 貫である。菜種も苧も、栽培は採油が主な目的と考えられるが、この菜種の吉城郡への生産量の偏りは、苧には無い特徴である。

煙草の記載村数は 103 村、郡ごとには益田郡に欠落し、吉城郡が 57 村、大野郡が 46 村である。生産量は吉城郡が 83% と多数を占め、大野郡は 17% である。生産量の欠落は、両郡それぞれ 2 村であるため、大野郡に欠落が多い訳ではない。村あたりの生産量平均は吉城郡が 49.2 貫、大野郡が 12.2 貫である¹²。菜種同様に、煙草も吉城郡において生産が盛んであり、大野郡では量が劣っている。

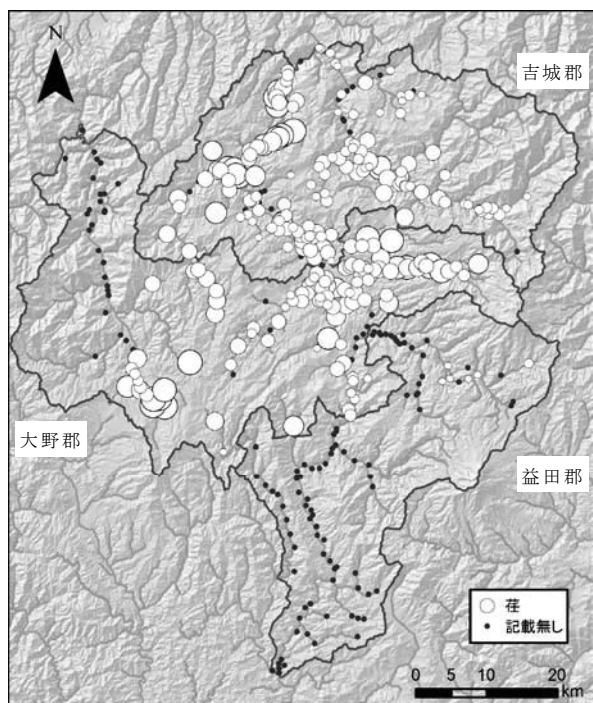
¹² 煙草の生産量の単位には、貫と斤があった。煙草では一斤 160 目の斤目が一般的であるため、これを用いて換算した。



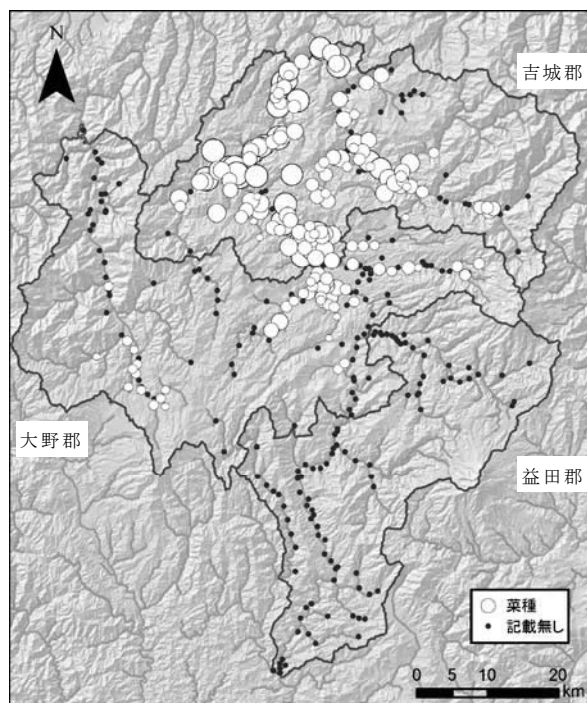
桑の地理分布
(255 村, 688290.2 貫)



煙草の地理分布
(103 村, 3367.14 貫)



苳の地理分布
(252 村, 548.07 石)



薬種の地理分布
(174 村, 391.3 石)

図9 桑・煙草・苳・薬種の地理分布

6. おわりに

本稿では繊維・織物類・紙類等を対象に、その生産量と地理分布について見てきた。飛騨でのこれら産物の特徴は次のようにまとめることができる。①飛騨地方では繭と生糸が主な商用の産物である。これらに次ぐ布・楮の金額は6,762両であり、繭・生糸の合算285,059両のわずか2.37%である。②益田郡に集中／欠落する産物がある。生糸・紬の生産が集中し、布・麻・桑・苧・菜種・煙草の記載が欠落する。吉城郡に集中する産物には紙と菜種がある。繭・真綿・楮は3郡に分布している。③産物の二次的な加工は集約している。楮を原料とする紙の生産は吉城郡小鷹狩郷に、繭を原料とする生糸・紬の生産は益田郡に集中している。これらの地域ではその産業に労働力の多くが割かれるため、他の産物の記載が欠落する。吉城郡小鷹狩郷では桑・麻の記載が少なく、益田郡では布・麻・桑・苧・煙草が欠落する。

繭と生糸の生産金額の合計は285,059両である。『斐太後風土記』下巻附録の換算値¹³を用いて、これを米の量に換算すると48,460.03石となる。前稿（松森2016）では主要な穀物類・豆類を整理し、主エネルギー源となりうる産物として米・稗・大麦を取り上げた。その生産量は米がおおよそ5万石、稗が3万石、大麦が1万石である。繭と生糸の生産金額からは、飛騨地方で生産されている米の量（5万石）と、おおよそ同等弱の米（4.8万石）が得られることが分かる。また『斐太後風土記』に記載されている人口は92,081人であるため、米・稗・大麦の収量と繭・生糸の収入を合わせて、この人口を十分充足していたと考えられる¹⁴。

本稿では、繊維・織物類と紙類、そして煙草と油類の産物に焦点を当て、その生産量と地理分布

について考察した。『斐太後風土記』記載の商品作物、手工業製品には多く種類があるが、本稿では記載頻度の高いものを中心とした。低頻度の産物にも、地域的に偏る特徴的なものがあり、例として小八賀郷の蕪、竹原郷および高山の酒、下高原・吉城・川上・大八賀郷の薪・楮・炭などが挙げられる。これらについては稿を改めて報告したい。

参考文献

- 蘆田伊人編 1915『大日本地誌大系 第七冊 斐太後風土記 上』大日本地誌大系刊行會
- 蘆田伊人編 1916『大日本地誌大系 第十冊 斐太後風土記 下』大日本地誌大系刊行會
- 石川松太郎 1998『江戸時代 人づくり風土記 28 兵庫』農山漁村文化協会
- 岐阜県 1972『岐阜県史〈通史編 近世 下〉』大衆書房
- 小山修三・松山利夫・秋道智彌・藤野淑子・杉田繁治 1982「『斐太後風土記』による食糧資源の計量的研究」『国立民族学博物館研究報告』第6巻 第3号
- 松森智彦 2013「村落の文化系統学的：飛騨地方の明治初期物産誌『斐太後風土記』を対象に」学位論文
- 松森智彦 2016「『斐太後風土記』記載産物の生産量と地理分布（1）—穀物類・豆類を対象に—」『文化情報学』第11巻2号 pp.75-83
- 宮下美智子 1968「天保期における農家家計—河内国河内郡四条村中塚家の場合—」『大阪教育大学紀要』第17巻, 第Ⅱ部門 pp.67-78

¹³『斐太後風土記』下巻附録の「必要品他國より買入高凡積」（明治三年）によれば、米 15,000石を 88,230両で買入れている。すなわち金額換算は0.17石／両である。

¹⁴米 5万石と繭・生糸からの収入の米 4.8万石、さらに稗 3万石、大麦 1万石の穀物は、一人一年米一石と換算した場合、上記の人口を十分充足すると考えられる。ただし、この推計は年貢を考慮しておらず、山地は運搬に困難を伴うので、穀物の移入量の限界もある。またこの金額は純利益ではなく、原料代その他経費を考慮していない。しかし、当時の飛騨の村々は単に自給自足的ではなく、商品経済と密接に関係していたことは窺い知ることができる。繭・生糸の売り先は飛騨国外であり、京都西陣や横浜より日本国外に売りだされていた。